
目が覚めたら世界が終わってた

flat_flater

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目が覚めたら世界が終わってた

【Nコード】

N4343Z

【作者名】

flat | flater

【あらすじ】

突如学校に現れた謎のモンスター相手に死闘を繰り広げ、仲間と共に命からがら生き延びた女子高生。

——とかだったら少しは格好がついたものの、私が目覚めたときには既に世界が終わってた。これは自称魔法使いの恋咲凛音こいさきりんねが、ならず者や巨大モンスターの闊歩する町でひっそりと生きていく話***
*ちよくちよく改訂していくので注意***

EP1：目が覚めたら世界が終わってた（前書き）

阿鼻叫喚のモンスターパニックと超能力バトルを合わせた感じの小説を書きたかった。

EP1：目が覚めたら世界が終わってた

突如学校に現れた謎のモンスター相手に死闘を繰り広げ、仲間と共に命からがら生き延びた女子高生。

——とかだったら少しは格好がついたものの、私が目覚めたときには既に世界が終わってた。

＊

私の名前は恋咲凜音。こいさきりんね聖歌学園に通う3年生だ。

ちなみに聖歌学園なんて少し恥ずかしい学校名をしているが、特にこれといって特徴の無い普通の学校だ。

が、それじゃ私がつまらないので、生徒会長になってから「ごきげんよう週間」を作ったことがある。

生徒会役員（女の子）を校門に立たせて、登校してきた生徒に向かって「ごきげんよう」と挨拶をさせるのだ。

教員連中が少し難色を示したが、校風の革命云々それっぽいことをつらつら話したら、短期間ならという条件付で許可をもらった。勿論ただの私の趣味だが。

恥ずかしそうに頬を染め「ご、ごきげんよう……」と挨拶をする女の子を見て、一部の男子生徒は涙を浮かべ、更には遅刻常習犯の生徒数名がその週だけは異様に早く登校してきたりと、なんだか思わぬ副次効果があったりもした。

勿論、一番喜んでいたのは私だが。

っと話が逸れた。

取り敢えずは私の位置情報の確認だ。まあ、これはGPSを使うまでもない。

朝、起きてからずっと家に閉じこもっているから。

私が住んでいるのはアースクエイク桐ヶ谷という学園と駅の丁度中間くらいに位置する小綺麗なマンションの4階の4号室（404号室）だ。ドキッとするような名前のマンションだが、耐震性はしっかりしているらしい。

妙にダルイ身体を起こして、入学時に買った黒い目覚まし時計を見ていると、短い針が11と12の間くらいを指してた。

一瞬焦ったけど、どうせ遅刻なら盛大に遅刻してやれと思い直し、インスタントのレモンティーを作ってベランダの扉を開け、カップに口をつけながらいつもの外の景色を眺めた。

晴れ渡る空の下、^{もと}人が走ってた。

というか絶叫してた。

見える範囲の道路は車で埋め尽くされ、所々で事故が起こってた。

んで、人々の絶叫と車のクラクションをBGMにして、

なんか——でっかい鳥みたいなのがいっぱい走ってた。

これが30分くらい前。

——で、まあ、ここまではいい。

いや、だいぶ良くないけど、取り敢えずはいい。問題はその後だ。

私は驚いた。なんたつて、目が覚めたら外が凄いことになってるんだよ？　いつも冷静を気取ってる私でも流石に少しは驚く。んで、驚いた拍子に手に持っていたカップをベランダの外に落としちゃったわけだ。

勿論、カップは重力に反することなく落ちていくよね？　具体的には重力と空気抵抗が釣り合った感じで。ほんの数分前まで、私もそう思ってた。

カップを落とした私は焦ったさ。雑貨屋で2000円も叩いて買った、黒猫柄のおしゃれなやつで、私が今一番気に入っているカップだったから。

私はベランダから身を乗り出して落ち行くカップに向かって手を伸ばし、そして叫んだ。

「逝くなーッ！」

私は自分の物は大切にするから、小さなものでも一つ一つがもの凄く大事なわけだ。

しかし、流石の私でも物理法則に抗あらがうには10年ほど早かった。

カップはシャンッ！　と音をたてて、地面に吸い込まれた。私は泣いた。

泣いて、泣いて、涙にぼやける両目で、遠くに見える黒猫カップの亡骸をぼんやりと眺めてた。

その時だ、壊れたカップが、まるで天に召されるかのように宙に浮き、私の前まで飛び上がってきた。

最初は夢かと思った。私の淡い幻想が起こした幻かとも。でも、違った。

それは物理法則を一切無視するかのごとく、宙に浮いたまま動かな

い。

レモンティーの雫を纏った細やかな破片が、太陽の光を反射してキラキラと光る様子には私は目を奪われた。

しかしそれだけじゃあ、あんまり面白くない。もっとうこう、ぐるぐると回る銀河みたいな感じで。

と、思ってたたら、カップの破片たちがなんかこう、銀河がぐるぐる回る感じで回転しだした。

マジで？　とって、こんどは止まれっと念じてみた。瞬間、空をぐるぐると回っていたカップの破片たちがピタリと静止した。

10年なんてもんじゃなかった。

——どうやら私には物理法則を凌駕する力があるらしい。

＊

と、というのが今までの出来事の一連の流れ。

外に出るのは危ないらしいので今は自宅待機だ。

んで、昔バードウォッチング用に買った双眼鏡を構え、文字通りバードウォッチングをしている。

でっかいニワトリだ。

大きさがはんばないことと、人間を食べてることを除いたら。

ニワトリのあのカクカクとした動きは割りと可愛いとっていただけ、撤回だコレ。

2メートル近いニワトリにやられたら軽く恐怖だった。

注意してみると、その太い嘴くちばしで自動車の窓ガラスを貫いている。

そして慌てて出てきた人を、更に一突き——しようとしたところで私が放った高速の弾丸が急所である眼球へと突き刺さる。

ピギャー！ と悲鳴をあげてよろめくニワトリ。

間一髪で難を逃れたサラリーマンの中年おやじが悲鳴をあげながら逃げていく。

「よしっ」

私は口に含まいくつかのマーブルチョコを噛み砕き、笑った。

今、私の頭の上で色とりどりのマーブルチョコが円環を描きながら浮いている。^{えが}

最初是一つずつ宙に浮かせる練習をしてたんだけど、一つ、二つと増やしていくうちに一箱、二箱になって、今は多分四箱分くらいになっていると思う。ちなみになんでマーブルチョコかというと単にあの綺麗な配色と形が気に入ってるからだ、あと美味しいし。

私は頭上で回るマーブルチョコのうち一つを自分の口内へと誘導した。

うん、やっぱり美味しい。

よもや私の人生で手を全く使わずにマーブルチョコを食べる日がこのようなとは、いったい誰が想像できようか。

これこそが私の第一の魔法、虹色の円環である！^{オート・マーブル}　ちなみに今、命名した。

うん、即決にしてはカッコいいんじゃない？　マーブルってなにか知らないけど。

とにかく、騒ぎが一段落するまではここで高みの人助けを決め込もうと思います。

EP2：現状を確認しよう（前書き）

てきと〜だなあ。

EP 2：現状を確認しよう

『——総理は今回の報告を受け、警察の手には余るとの判断を下し一刻も早い自衛隊の出勤を——』

*

あれから一時間が経過した。

今まで4階のベランダから下を見下ろしながら、ニワトリから逃げる人を助けてただけど、みんなそれぞれ避難したのか見える範囲で確認できるものといったら、穴を穿たれ捨て置かれた車、小火^{ぼや}を起こしたのか煙をあげている民家、散乱したガラス……そして、逃げ遅れた人々の死体と、それを貪^{むさぼ}るニワトリ型のバケモノ。どれもこれも思わず目を背けたくなるような光景ばかり、私が数時間前まで住んでいた世界は形を変え、全くの違うものへと変貌していた。

流石の私も結構疲れた。

なにか知らないけど、魔法を使うたびに精神的な何かが削られているような感じがするのだ。

最初は何も感じなかったんだけど、30分、40分と時間が経つほどそれが顕著に感じられるようになってきた。

私はその削られていく何かを、仮に魔力と呼んでいる。

あえて言うが、これは超能力なんかじゃ断じてない。魔法だ。そっちの方がなんか、ロマンがある。

ところで、情報化社会である今日、家にいながらにして国内だけでなく世界各地の情報を手軽に集めることが出来る。

そして、ここ数時間のニュースは大きく三つに分けることが可能だ。

一つは、知ってのとおりバケモノの襲来。

ただこれはニワトリだけに留まらないらしく、かなり色々な種類がいるらしい。バイオテロによる元来の動物の突然変異という見方が一般的だが、現実味はない。なにせ、世界中で同時に発生してるわけだから。

二つ目は、超能力者まほうつかいが出現したこと。

これもここ数時間でかなりの数が観測されているらしい、ネットでは賛否両論な感じで騒がれてる。つまり否定派の意見として、ヤラセじゃね？ とか、非科学的だ、とか。

何時間か前の私なら同じように否定したかもしれないが、この情報は確実だと思う。ソースは私。

最後、三つ目は奇病の話。

これも、ここ数時間の間に起こっており、そして最もたちが悪い。簡単に説明すると、この病気に罹ると少しずつ身体が弱っていき意識を失う。そしてその後、身体がまるで水晶のように結晶化するらしい。

原因は不明で致死率100パーセントの難病だ。

年齢が10〜20代にはほぼ影響がなく、患者はそれ以外の年齢層がほとんど、という噂うわさもあるけど、確証は無い。と。

「ふう……」

私は開いたいくつかのサイトを閉じ、メモ帳に書いた文章を保存する。

「えと、ファイル名、ファイル名……『プリンが食べたい．txt』
……エンターツ！　よし、できたっ！」

私はノートパソコンを閉じ、立ち上がると現在は閉め切っている
カーテンを少しだけずらし、外の様子を垣間見た。

「いやあ、だいぶひどくなってきたなあ……」

先ほど調べて、バケモノには色々な種類がいると言ったが、その
とおりだ。

実際外をチラリと見ただけで数十の鳥が我が物顔で空を舞っている。
勿論ただの鳥じゃない。なんていうか、プテラノドン級のやつだ。
全身真っ黒な羽毛に包まれているため、おそらくとはカラスだっ
たんだと思う。超怖い。

安易に外へ繰り出して、ぱくりとやられるのは嫌なのでしばらくは
家に引きこもろうと思う。

魔法を使いすぎて身体もダルイ。

「シャワーでも浴びよう……」

正直、この状況でいつまで電気や水が使えるか、分かったものじ
ゃない。

今のうちに贅沢の限りを尽くしておこう。まあ、たいした贅沢は望
めないんだけど。

＊

お風呂のお湯を魔法で動かしたりして遊んでいたら、余計身体が

ダルくなった。

でもおかげで不定形なものを操るのはかなり難しいということが分かった。今度から魔法の練習は水でしよう。

お風呂からあがった私は、まず、これからの引きこもり生活のために必要不可欠な食料を確認することにした。

とにかくまずは水から。なんたって人間、水だけでも何週間かは余裕だとかどっかで聞いたことがある。

私は部屋の片隅に押しやっていた大きく膨らんだゴミ袋を引っ張り出す。それにはごみに出すために大量に溜め込んでいたペットボトルが大小約二十個ほどが入っていた。

さて、今からこれ全部に水を入れていく作業に入る！

「うう、終わったあ」

ひとつひとつはたいしたことは無くてもこれだけの量の水を長時間ペットボトルに入れ続けるのは大変な重労働だった。

私はかじかむ両手をさすりながら満タンになったペットボトルを満足げに見下ろす。

これで、しばらくは大丈夫だろう。

よし、次は、食べ物だ。

私は冷蔵庫を開けた。

が、一人暮らしの冷蔵庫なんてたいしたものは入ってない。数種の野菜と冷凍された肉類、といったところだ。

米も先日ほぼ使い切ってしまったためあと一合あるかないかといったところ。

私は他にもめぼしいものがないかと部屋中を探した。

15分後、他に見つかったのは、インスタントラーメンが3個。以上。

すくなっ！

なにこれ！？　こんな装備で私にどうしろと！？

やばい、私、しばらくは本格的に水だけで生活することになるかもしれない。くそう、もっと非常食とかいっぱい買い込んでくんだっ
た……。

まあ、こればかりは仕方がないとあきらめるしかないか。

慌ててカーテンを閉めた。

私はベッドに倒れこみ、魔法でマールチョコを一粒口内に移動させ、カチカチと音をたてて動く掛け時計の針を眺めながらこれからのことを思案した。

食料も無い、水ももう少しで尽きる、電気も無い。

そんな家にいつまでも引きこもっていてもいずれ餓死するのは明白だ。

それなら、まだ身体が元気なうちに思い切って外に出てみるほうが得策かもしれない。

いや、絶対にそれがいい、うん、そうしよう。

私は、ガバッとベッドから身体を起こし、服の入ったクローゼットを漁った。

戦闘に備えて出来るだけ動きやすい服を選んでいく。

結局、膝丈のハーフパンツとレギンス、黒の長袖インナーの上にポンチョという服装になった。

今年の冬は冷えるとのことだが、余分な厚着は動きを制限するし、第一私自身寒さには強いのでこんなものでいいのだ。

それから私はリュックサックに最低限の物資を詰め込んで背負う。靴も動きやすさを重視したスニーカーだ。

私は玄関に座り込み、靴紐をきつく締め終えると、自分の家の玄関を6日ぶりに開けはなった。

＊

開けた瞬間、血の匂いが冷気に乗って私に押し寄せてきた。久しぶりの外の匂いは随分と変わっており、私は眉を^{ひそ}顰めた。

「早くしないと」

第一の目標は食料の調達、後は現状の詳しい情報が知りたい。

私は無意識にエレベーターへ乗ろうとするが電気が止まっているのを思い出して、階段へと向かった。

出来るだけ足音を立てないように、ゆっくりと階段を下り、遂にマンションの外へと出た。

空を見上げると大きな鳥が獲物を探るように旋回しているため、安易に飛び出したら普通ならその時点ではくろだろう。

が、そこは私。

忘れていると思うが、私は魔法を使える。

しかも、この5日間それを使いこなす練習を積んできたのだ。大丈夫、いける。

私はポケットからビー球を一つ取り出し、目の前に浮かせ旋回する鳥に向け照準を合わせ、射出した。

初速から、最高速度で発射されたビー球は凶弾となり、悠然と空を飛んでいた巨大な鳥の身体にのめりこんだ。

「ギャアーー!?!」

と何が起こったのか分からないといった様子で痛みにもがきながらも墜落はせずに、他所^{よそ}へと飛び去っていく。

「硬いなあ、やっぱり威力が足りない、弾も使い捨てだし節約しないと」

まあ、その辺の石をぶつけてもいいわけだけど、それは私の趣味に反するため却下だ。

もつともそうならないように弾はそれなりに用意した。

が、少なくとも今の私じゃ、一匹を倒すのにもかなり苦戦を強いられそうだ。

私は膨らんだポケットに手を突っ込みながら、歩みを進めた。

食料調達のために立ち寄ったコンビニ数件は、ほとんどが荒らされ、食料という食料がなくなっていた。

人間の仕業か、バケモノの仕業か分からないがこうなったら少し離れたショッピングモールまで行くしかなさそうだ。

ため息をついて、本日5件目のコンビニを発とうと開けっ放しの自動ドアから外に出た。

と、その時、「キャアーーー!!」と女性の甲高い悲鳴が響き渡たり、その悲鳴の聞こえた方角から、数名の学生と思われる集団が走ってきた。

と、というか私の学校の生徒だった。久しぶりに人間を見た気がする。しかしその顔は皆恐怖に染まっており、私の存在など見えていないようだった。

そして口々に叫ぶ。

「やばいよ! 早く、早く逃げないと!!」

「嫌だ! 死にたくないっ!!」

「だ、大丈夫よ! あの役立たずもこれでやっと役に立ったんじゃない!?」

「しかたがなかったんだ!! 許してくれっ!!」

私は直ぐに理解した。

誰かを囮として使ったことを。

私は逃げる女子生徒の服を掴んで強引に引き寄せた。
そして顔を思いっきり近づけ問いただす。

「どこっ!!」

「ひっ!? え? か、会長お!? なんで……!!」

女子生徒は自分の学校の生徒会長の姿を見て驚いているようだが、
こちらにそんな暇は無い。

「いいから教えなさい!! 置いてきた人はどこにいるの!!」

私の剣幕に押されたのか、女子生徒は泣きながら答えた。

「あ、あの、曲がり、か、角の向こう、ですっ」

私はそれを聞くと女子生徒を解放し、彼女が指差した方向に向かって
って全速力で駆けていった。

EP 4：戦ってみよう

私の魔法はかなり便利で使い勝手もいいのだが、一つ欠点が存在する。

それは内側にほとんど作用しないこと。

つまりは、自分自身を浮かび上がらせることが非常に困難であることだ。

外側への干渉はそれなりに使いこなせるだけに、何で？ というのが本当のところだが、こればかりは謎である。

＊

住宅街を走り抜け、女子生徒が指差した曲がり角を曲がる頃には、私は肩で息をするほどに疲れきっていた。文化系なめるな。

しかし、全力疾走しただけのことはあったらしい。

一人の女子生徒が、アスファルトの地面にへたり込み一匹のバケモノに追い詰められていた。

幸い大きな怪我は負ってないようだ。

バケモノの方は……やっぱりそうきたか、という感じだった。

茶黒い体毛に鋭く尖った爪、ピンと伸びた耳、涎よだれを滴らせ大きな牙を覗かせる口。

犬、とは生ぬるい表現だった。

そのライオンを二周りほども大きくしたようなワンコは女子生徒を堀へいの方へと追い詰め、ゆっくりと距離を縮めている。

私はポケットからビー玉を一つ取り出し、ワンコに向かって思いっきり投擲した。

物理法則に従い放物線運動を描き飛んでいたそれは、途中、第二の法則により急加速する。

目にも留まらないスピードで、私の放った弾丸はワンコの身体に吸い込まれた。

ワンコが突然の刺激に驚き、巨体のわりに随分と俊敏な動きでその場から飛びのき私の方へと身体を転換し、低いうなり声をあげる。

あれ？　もしかして、全然効いてない？

そう思い私が第二投を撃とうと、ポケットに入った無数のビー玉を一掴みしたところだった。

うなり声をあげながら様子見をしていたワンコが、地を蹴り、私の距離を一気に詰めてきた。

「ちょ！　はや——！」

焦った私は、手に握ったビー玉を地面に落としてしまう。

コロコロとゆるい傾斜を転がっていく無数のビー玉。

「くっ！」

私は手に残った一つのビー玉を、今なお涎を振りまきながら接近してくる騾しっけのなっていないワンコに向かって射出した。

ノーモーシヨンかつ高速で飛来するビー玉を初見で避よけるのは難しい。

ビー玉は私の狙い通り、ワンコの額部ひたいに突き刺さった。

しかしワンコは衝撃に一瞬よろめくも、頭を数回左右に振ると、白濁した瞳で私を睨みつけ、警戒するような動きで私から距離をとる。

予想以上に硬い！　多分鳥の数段上だ。

おそらく私の攻撃は毛皮に阻まれて、肉体にはほとんど届いてないだろう。このままじゃ、何度やってもこいつを倒すのは不可能な気

がする。

さて、どうしよう。

私は、残ったビー玉をポケットの中で弄もてあそびながら、ワンコの背後に見える女子生徒を見た。

気を失っているようで、塀にもたれかかり目を閉じている。

「これは、逃げるわけにもいかないか……」

私は残ったビー玉を取り出し、自分の頭上へと誘導、そして半自動的な円環運動をイメージした。

虹色の円環オート・マールと、その場のテンションでちょっとアレな名前をつけたこの魔法は、決してただのかっこつけだけものではない。実際私はここ五日間、部屋にこもって魔法の練習と検証ばかりをやっていたのだ。

この魔法は多少のリスクも背負うが、その分メリットもある。

唯一にして最大のリスクが、常時の魔力消費による疲労度が大きいことだ。

しかし、それを除けばメリットはかなり大きいと言える。

まず最初に、半自動での円環運動をイメージしたことにより、余程のことがない限り武器が自身から離れることがないということ。

更にこれは、いちいち意識を向けなくても最初にイメージをしてしまえばあとは勝手に運動してくれるので、戦闘に非常に向いていると言える。

第二に、インターバルゼロでの連射が可能だということ。

集中して一撃一撃を放つのは違い、これは少しでも意識を向けるだけで弾が円環運動の軌道を離れ、私の意図した方向へ飛んでいく。

そして多少だが威力が上がる。

「さて、さくつと勝負を決めないと」

私がこの状態で戦えるのは、実践だと30分持てばいいほうだと思う。

これからのことを考えると力は温存しておきたい。

私は頭上で回転する無数のビー玉に意識を向けた。

ヒュ、ヒュ、ヒュ、と小さなそして鋭利な音をたて、3つのビー玉が連続で発射される。

しかしワンコの両目を狙った私の攻撃は機敏な動きによって悉く回避された。

内、二つはワンコの胴体部分に命中したが、どうせ大したダメージは無いはず。

そのうちワンコは私が大した脅威ではないと確信したのか、再度私に襲い掛かってきた。

刃物のような牙が私に迫る。

車のような速さで迫り来る巨体に、ちまちまとした攻撃は意味がない。

「ああ、もうっ！ 全部行け！！」

私は迫るワンコに向け、全弾を発射した。

EP5・・・褒美を堪能しよう（前書き）

イベント発生。

EP5：ご褒美を堪能しよう

私が苦し紛れに放った弾幕は螺旋軌道を描きながらワンコに襲い掛かる。

ドドドドドドッ！　と、鈍く重い音の連続。ワンコの表情が歪んだ。

そして、その内の一発がワンコの左目に命中する。

「ガアアア！！」

やった！　そう思ったその時、苦しみにもがくワンコの前足が私に振り下ろされ、その爪が私の太股をザックリと切り裂いた。ぷしゃっ、と鮮血が舞う。

綺麗だな。

最初は自分の太股から吹き出る血しぶきをまるで人事のように観察していたが、時間がたつごとに患部が熱を持ってくるのを感じた。そして数秒後、それを自覚する。

今まで感じたこともない、常に身体を何かで挟えぐられ続けているような激痛が私を襲った。

「あゝあゝー！　ぐう、い、いた……」

私は激痛に耐えながら、目の前で暴れるワンコから距離を取ろうとするが、切り裂かれた左足が言うことを聞いてくれない。

切り裂かれた左太股を見るとパツクリと皮膚が捲くれ、ピンク色の肉が見え隠れしている。

出血もひどいし、このままでは血の流しすぎで死ぬ！

私は無作為に振り下ろされる凶刃を地を転がるようにして避ける。動くたびに感じる激痛を我慢しなんとか反撃しようと、転がっている小石類を魔法でぶつけようとするも、集中力が散漫になり上手く操ることができない。

やけくそ気味にワンコに放った小石類はほとんどが意図した方向とは違う方へと進み、ワンコのほうは当たろうが、当たるまいが関係ないとばかりに私に迫ってくる。

「もう！ しつこい！」

背負っていたリュックサックをワンコへ投げつけるも、中身を散らばらせるのみでただワンコを興奮させただけのようだった。ワンコの怒り狂った攻撃が続く。

いくらワンコが痛みに錯乱していて攻撃が単調だったとしても、足に怪我を負った私では避け続けるのにも限界がある。

四撃目を避けた時には私の体力は限界に来ていた。

そして五撃目、私の頭を喰いちぎる気なのか開かれた顎あぎと、そして凶暴に尖った牙が私に襲い掛かってきた。

左足の激痛に朦朧としながらも、私は起死回生の一撃を放つため周囲の武器になりそうな物を探した。

ゴロンッ。

と、私の目に最初に飛び込んできたのは、鈍い光を発して輝く野球ボール程の大きさの石。

ああ、そういえばこれも持ってきたんだった。

おそらく、先ほどリュックサックを投げつけたときに中からこぼれ落ちたのだろう。

私は、フツと笑みを浮かべる。

「……頼むよ？」

薄れゆく意識の中で放ったその石は眩しい輝きと共に私の手を離れるやいなや、ワンコの身体を一直線に食い破った。
混濁する意識の中でその様子を見届ける。

そして、プツリと意識が途切れた。

＊

「——んぱい——きてください」

身体を揺さぶられる。

深い眠りに誘うような優しい振動。
いよゑな

「——なないでください」

ああ、やけに心地のいい感触だ。
それになんだかいにおいが……。
あ、そういえば私死んだんだっけ。
だったらこのかわいい声は天使かな——。

「せ、んぱいっ！ めえ、あげてぐだ、ください！」

と、女の子の悲痛な泣き声と共に、私の意識が完全に覚醒する。
まず目に飛び込んできたのは、適度な大きさに膨らんだ世界で最も

美しい双丘。そうぎゅう

どうやら私は女の子に抱きかかえられているようで、ほとんど顔を胸にうずめている状況だった。

彼女はまだ私が目を覚ましたことに気づいていないようで、私をぎゅっと抱きしめながらすすり泣いている。

なので、仕方が無いのもっとこの状況を堪能することにしようと思う。

顔を、柔らかくいいにおいのする胸へとうずめる。

クンクン、あゝいいにおいだ。

ほお擦りほお擦り、と。

「ん……あ、せ、んぱい？」

スンスン、スンスン。

あゝ、たまらん、ずっとこうしてたい。

もう私は絶対離れないぞ。

そうだ、これは対価だ。私がんばったし、少しくらいご褒美あってもいいよね。

うん、これは神様からの私へのご褒美に違いない。

はゝ、柔らかくてきもちゝなゝ。

モミモミ。

「あつ、んあ、や、ん……せ、んぱあい」

うりゃ、更にはお擦りほお擦り。

かゝらゝのゝ、モゝミモゝミ。

「あ……せん、ぱい、やあ、ん、だ、だめえー!!」

「ぐはっ!」

「ああ! ごめんなさいっ!! 大丈夫ですか!？」

はっ! あまりの嬉しい状況に少しかり混乱していたようだ。
心配そうに私を覗き込む女の子を見上げる。

制服は泥だらけで、スカートなども所々が破れている。

リボンの色は青なので一年生なのだろう。

目に付くのが、肩まで伸ばしたサラサラの黒髪。

——この娘を含め私も通う聖歌学園という学校は校風も比較的ゆるく、茶髪もやり過ぎない程度になら許容されているため、このような黒髪はわりと珍しかったりする。まあ私も生まれてこのかた髪を染めたことは一度も無いのだけど。ナチュラルで未加工なままである。——

身長はあまり高くはないようだが、出るところは出ているみたい。まあ、これは私がさっきまで堪能していたわけだが。

それと顔のほうは、これはもう可愛いと一言で表すしかない。

化粧はしてないように見えるが、もとがいいのかスッピンでもそこらの変に化粧した女よりも断然可愛い。

少々たれ目で、優しそうな雰囲気を持っているのもポイントが高い。

と、いうか、なんだか顔もほんのり赤くなって、息遣いも……ジュルリ。

「あの、せ、せんぱい? 大丈夫ですか?」

はっ！

「あ、ああ、うん、大丈夫、もう大丈夫よ、ちょっと混乱してたみたい、ごめんね？」

「あ……いえ、う、私は別に……」頬をほんのりと染める女の子。マジ可愛い。

さて、と。私もそろそろ起き上がるとするか。そう思い立ち上がろうとしたとき――

「って、あれ？」

私は妙な違和感に気づくのだった。

EP5: ご褒美を堪能しよう (後書き)

お気に入り登録してくださった方が3人も！

3人と言ったらアレですよ、もう大富豪とかできるレベルの人数ですよ。いや感激です、ありがとうございました。

EP 6 .. 疑問を抱いてみよう

なんとかいうか、普通に起き上がれることに対する強い違和感が……。
 なんだっけ？ えーと……私は確かワンコと戦って、足を怪我して、
 んで負けそうになっ——

私、左足怪我してなかったっけ？

*

引き裂かれたハーフパンツとレギンスの下に見える太股は血はついているものの、怪我の痕跡が全く見当たらなかった。

今気づいた、妙な違和感はそれだ。

あれだけの怪我が自然に治るわけがないし、そういえば痛みどころか疲れすらないような……。

え？ ワンコと激闘を繰り広げたのって私の夢？

私はバツと後ろを振り向くと、私が倒した（ような気がする）ワ
ンコの巨体を探す。

と、すぐ隣ににぐったりと横たわる茶黒い毛皮を発見した。

探すまでもなかった。
めっちゃ伏せてる。

え、でも夢じゃなかったってことは……。

「あ、あの、せんぱい」

私がウンウンと唸っていると、女の子が心配そうな表情で私の上着の裾をつまみ、と弱々しく引っ張ってきた。

「うん？ どうしたの？」

何気なく私のツボをついてくる仕草に対し心の中で身悶えしながら、私は微笑みを浮かべた。

生徒会長選挙のために覚えた、私の持てる限りで最上の笑顔だ。それに対し女子生徒はほんのり赤かった頬を更に紅潮させながらしどろもどろに言った。

「えっと、そ、その、か、身体のほうは大丈夫ですか？ う、私、いっぱい血が出てたからどうしたらいいか分からなくてっ、せんぱいの服少しか破いちゃいました。その、ごめんなさいっ！」

私は、女子生徒の突然の謝罪に一瞬困惑する。

「というか、え？ 服？」

いや、確かに全力で破れてはいるけど、これは99パーセントあのワンコが悪いし……？

「あの、ちよっといいいかな？」

「は、はいっ」

いや、そんなに怯えなくても……まあ、いいんだけど。

「大丈夫、怒ってないよ。それよりさっき、血が出てたからって言

ったよね？」

「は、はいっ」

「間違いない？」

「は、はいっ、間違いないです……あの、それで……」

ふむ、なるほどね。

これは、あれだ、今流行の魔法ブームだ。

おそらくこの娘もその波に乗っている感じなのだろう。

で、その力で私の怪我を治してくれた、とそういうことだろう、多分。

「うん、君が怪我を治してくれたんでしょ？　ありがとう」

「あ、あの、何も聞かないんですか？　怪我のこと……」

「うーん、なんとなく予想がつくからね」

私はそう言って地面にかがみこむと、転がっていたビー玉を一つ拾った。

そして、おもむろに宙へ浮かべ、びっくりした顔をしている女の子の周りをゆらゆらと浮遊させた。

女の子の視線はビー玉に合わせ左右を行ったりきたりしている。

私はクスリと笑みを浮かべた。

「多分君もこんな感じの力が使えるんじゃないかな？」

「えと、よ、よく分からないです。パアって傷口が光って、そした

ら……」

うん、多分間違いない。これは回復系かな。
しかし、魔法を使える人って実はいっぱいいるのだろうか。

「そっか、とりあえずありがとう」

「い、いえ、それよりそれ……」

「ああ、これ？」

私は浮遊させていたビー玉を女の子の前にゆっくりと落としていった。
女の子がそれを不思議そうに見ながら両手で受け止める。

「ちょっとした魔法……とにかく場所を変えようか。ずっとこんな道路の真ん中にいたら危険だしね」

「はい、分かりました」

さて、まずは散らばった荷物を拾わないと、ついでにまだ使える弾丸も拾って、と。

ワンコの周りには無数のビー玉が転がっており、私はそれらを一つ一つ拾い集めていく。

うーん、結構集まったな。

私はビー玉を集めたポケットをジャラジャラと鳴らしながら、取り残しがないか軽くあたりを見回した。

「お？」

と、ワンコの身体の下で何かがキラリと光ったような気がして、ためにしにワンコの側でかがみこんでそこを調べてみた。

よく見ると、ワンコの身体で陰になるようにして淡い光を放つ小さな宝石のようなものがある。

拾い上げて明るいところで見ると、太陽の光を反射してキラキラと輝いた。

「それ、なんですか？」

「うーん、なんだろうね？」

そういえば、と思い立ち私はあるものを探す。

私が最後にワンコに放ったあの石。今拾ったものはそれに良く似ていたのだ。

もともとあの石は、初日、私がベランダからニワトリを狙撃していた時に発見したものだ。

はじめの方はチョコを飛ばしたりして半分遊んでいたのだが、途中からはもっと硬いものをと何故か溜め込んでいたビー玉を使いだした。

ニワトリは比較的防御力が低いようで、ビー玉での攻撃を何十発か命中させるだけで倒れた。

その時に、その倒れたニワトリの近くに転がっていたのがあの石だ。

ビー玉とも違うような、太陽の光を受けきらめくその石に対し私はどこか不思議な力を感じ、魔法を使って上まで引き寄せ、ずっと部屋に保管していた。

そして、今日外へ出る際になんとなくそれを手に取りリュックの中

に入れておいたというわけだ。
まさか、それが私の命を救うことになるとは思わなかったが。

目的のものは、ワンコから10メートルほど離れたところで見つかった。

しかし、それは全体にひびが入っておりもとの淡い輝きを綺麗に失っており、前みたい不思議な力を感じることもない。

私は、一応それも拾い上げポケットに入れると、ゆっくりと息を吐いた。
は

EP 6：疑問を抱いてみよう（後書き）

この物語は進めば進むほど薄く伸びていきます。
ねりけしみたいな感じです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4343z/>

目が覚めたら世界が終わってた

2011年12月21日20時45分発行